

第四章 神界旅行の一 (一四)

瓢箪のような細い道をただ一人なんとなく心急わしく進んでゆくと、背後の山の上から数十人の叫び声が誰を呼ぶともなしに聞えてくる。

そこで何がなしに後をふり返って見ると、最早二三丁も来たと思つたのに、いつの間にか、また元の八衢に返つていた。そこには地獄へ墜ちて行くものと見えて、真黒の汚い顔をしたものが打ち倒れている。これは現界で今肉体が息を引取つたもので、その幽体がこの所に横たわつたのであり、また先の大きな叫び声は親族故旧が魂呼びをしておる声であることが分つた。そうすると見ておる間に、その真黒い三十五六の男の姿が何百丈とも知れぬ地の底へ、地が割れると共に墜ち込んでしまった。これが自分には不審でたまらなかつた。というのは、地獄に行くのには相当の道がついておる筈である。しかるに、忽ち急転直下の勢で地の底へ墜ちこむというのが、不思議に思われたからである。とに角こつたふうになる人を現界の肉体から見れば、脳充血とか脳溢血とか心臓破裂とかの病気で、遺言もなしに頓死したようなものである。そこで天然笛を吹いてみた。天の一方から光となつて芙蓉仙人が現われ給つた。

『一体地獄というものには道は無いのでしようか』

魂呼び……気絶した人の靈魂を肉体に呼びもどし、蘇生させるための神わざ。

頓死……にわかに死ぬこと。あつけなく死ぬこと。

とたずねてみた。仙人いう。

『この者は前世において、現世においても悪事をなし、殊に氏神の社を毀つた大罪がある。それは旧い社であるからというて安価で買取り、金物は売り、材木は焼き棄てたり、または薪の代りに焚いたりした。それから一週間も経たぬまに病床について、黒死病のごときものとなった。それがため息を取るとともに、地が割れて奈落の底へ墜ち込んだのである。すなわちこれは地獄の中でも一番罪が重いので、口から血を吐き泡を吹き、虚空を掴んで悶え死に死んだのだ。しかもその肉体は伝染の憂いがあるので、上の役人がきて石油をかけ焼き棄てられた』

との答えである。そこで自分は、

『悶え死をしたものは何故こういふふう直様に地の底へ墜ちるのでしょうか』

と尋ねてみた。仙人は答えて、

『すべて人は死ぬと、死有から中有に、中有から生有という順序になるので、現界で息を取るとともに死有になり、死有から中有になるのは殆ど同時である。それから大抵七七四十九日の間を中有といひ、五十日目から生有と言ひ、親が定まり兄弟が定まるのである。ただし元来そこには山河、草木、人類、家屋のごとき万有はあれども、眼には触れず単に親兄弟がわかるのみで、そのときの、幽体は、あたかも三才の童子のごとく縮小されて、中有になると同時に親子兄弟の情が、靈覺的に湧いてくるのである。』

黒死病（ペスト）……ペスト菌の感染によつて発生する急性伝染病。ペスト菌は本来は鼠類の病原菌で、鼠類についた蚤がペスト菌を含む血液を吸つて人間に伝播する。また、ペスト患者の皮膚・粘膜から伝染し、飛沫伝染もする。潜伏期は一―七日で、突然悪寒を覚え、高熱を發し、頭痛・倦怠・めまいなどの症状を起し、皮膚は乾燥して紫黑色を呈する。腺ペスト・ペスト敗血症・肺ペストなどの病型があり死亡率が高い。古来欧州でたびたび大流行をくりかえした。

死有……死んだ直後の靈魂の状態。

中有……人靈が天の八衢へ仏者のいう六道の辻・三途の川辺に迷つこる。この間に近親者の追善供養がたいへん大事で、生有に大きく關係する。

生有……靈界での行く先が定まり、親がきまり兄弟がきまるとあります。ですから大善と大悪には中有はないとあります。

そうして中有の四十九日間は幽界で迷つておるから、この間に近親者が十分の追善供養をしてやらねばならぬ。又これが親子兄弟の務めである。この中有にある間の追善供養は、生有に多大の關係がある。すなわち大善と大悪には中有なく、大善は死有から直ちに生有となり、大悪はただちに地獄すなわち根底の国に墜ちる。ゆえに真に極善のものは眠るがごとく美しい顔をしたまま国替して、ただちに天国に生まれ変わるのである。また大極悪のものは前記のごとき径路をとって、悶え苦しみつづ死んで、ただちに地獄に墜ちて行くのである』

と。自分はそれだけのことを聞いて、高天原の方へむかい神界旅行にかかろうとした。ところが顔一杯に凸凹のできた妙な婦人が、八衢の中心に忽然として現われた。自分の姿を見るなり、長い舌をペロリと吐きだし、ことさらに凹んだ眼の玉を、ギロギロと異様に光らせながら、足早に神界の入口さして一目散に駆けだした。

自分は……変な奴が出てきたものだ、一つ跡を追って彼の正体を見届けてくれむ……と、やや好奇心にかられて、ドンドンと追跡した。かの怪女はほとんど空中を走るがごとく、一目散に傍の山林に逃込んだ。自分はとうとう怪女の姿を見失ってしまい、途方にくれて芝生の上に腰を降り、鼯に最後屁を嗅されたような青白いつまらぬ顔をして、四辺の光景をキョロキョロと見まわしていた。どこともなく妙な声が耳朶を打った。

耳を澄まして考えていると、鳥の啼き声とも、猿の叫び声ともわからぬ怪しき声である。

追善供養……死者の冥福を祈るため遺族などが神・仏に手を合わせて、死者に供え物などして供養をすること。

恐いもの見たさに、その聞ゆる方向を辿って荊を押しわけ、岩石を踏み越え溪流を渡り、峻坂を攀じ登り、色々と苦心して漸く一つの平坦なる地点に駆けついた。

見ると最前見た怪女を中心に、あまたの異様な人物らしいものが、何かしきりに囁き合っていた。自分は大木の蔭に身を潜めて、彼らの様子を熟視していると、中央に座を構えた凸凹の顔をした醜い女の後方から、太いふとい尻尾が現われた。彼はその尻尾をピヨンと左の方へ振った。あまたの人三化七のような怪物が、その尻尾の向いたる方へ雪崩を打って、一生懸命に駆け出した。

怪女はまたもや尻尾を右の方へ振った。あまたの動物とも人間とも區別もつかぬような怪物は、先を争つようにして又もや、右の方へ一目散に駆け出した。怪女はまたもや尻尾を天に向ってピヨンと振りあげた。

あまたの怪物は一斉に、天上目がけて投げ上げられ、しばらくすると、その怪物は雨のごとくなつて降り来たり、あるいは渓谷に陥り、負傷をするものもあり、あるいは荊棘の叢に落込み全身を破り、血に塗れて行きも帰りもならず、苦悶しておるのもあった。中には大木にひつかかり、半死半生のていにて苦しみ呻いているものもある。中には墜落とともに頭骨を打ち挫ぎ、鮮血淋漓として送り、血の泉をなした。

怪女は、さも嬉しそうな顔色をあらわし、流るる血潮を片っ端から美味そつに呑んでいた。怪女の体は見るみる太り出した。彼の額部には俄にニユツと二本の角が発生した。口は

たちまち耳の辺まで裂けてきた。牙はだんだんと伸びて剣のように鋭く尖り、かつ、キラキラと光りだしてきた。

自分は神界の旅行をしておるつもりなのに、なぜこんな鬼女のいるような処へ来たのであるかと、胸に手をあてて暫く考えていた。前後左右に、怪しい、いやらしい身の毛の戦慄つような音がまたもや、耳を掠めるのである。自分はどうしても合点がゆかなかった。途方にくれた揚句に、神様のお助けを願おうという心がおこってきた。

自分は四辺の恐ろしいそして殊更に穢らわしい光景の、眼に触れないようにと思つて瞑目し静座して、大声に天津祝詞を奏上した。ややあつて「眼を開け」と教ゆる声が緩やかに聞えた。自分はあまりに眼前の光景の恐ろしさ、無残さを再び目睹することが不快でたまらないので、なおも瞑目の態度を持ちつつづけていた。

そうすると今度は、前とはやや大きな、そして少し尖りのあるような声で、『迷うなかれ、早く活眼を開いて、神世の莊嚴なる状況に眼を醒ませ』

と叫ぶものがあつた。自分は心のうちにて妖怪変化の誑惑と思いつめ、……そんなことに乗るものかい、尻でも喰え……と素知らぬふうをして猶も瞑目をつづけた。

『迷えるものよ、時は近づいた。一時も早く眼を開いて、神界の経綸の容易ならざる実況を熟視せよ。神国は眼前に近づけり。されど眼なきものは、憐れなるかな。汝いつまで八衢に踏み迷い、神の命する神界の探険旅行に出立せざるや』

目睹……（「睹」は見る意）実際に見ること。目撃。

活眼……事物の道理をよく見通す眼識。物事を見抜く能力。

妖怪変化の誑惑……人智では解明できない奇怪な現象または異様な物体が姿を見せ（たぶら）かし惑わすこと。

と言つものがある。自分は心の中で……神界旅行を試み、今かくのごとき不愉快なることを目撃してゐるのに、神界の探険せよとは、何者の言ぞ。馬鹿を言つな、古狸奴、大きな尻尾をさげて居よつて、俺が知らんと思つて居やがるか知らんが、おれは天眼通でチャンと看破してゐるのだ。鬼化け狸に他人は欺されても、おれは貴様のような古狸には、誑らかされないぞ。見る眼も汚れる……と考えた。そうするとまた前のような声に、すこし怒りを帯びたよつな調子で、

『貴様は道を知らぬ奴だ』  
と唖鳴る。

そのとたんに目を思わず開いて見ると、前の光景とは打つて變つた莊嚴無比の宝座が眼前に現われた。その一刹那、松吹く風の音に気がつくくと、豈計らんや、自分は高態山のガマ岩の上に端座していた。

(大正二〇・一〇・一八 旧九・一八 外山豊二録)

瑞月

常暗の夜にもまがへる人心

狐狸も舌や巻かなむ

ガマ岩……聖師さまが修業された巖窟の左側にあるガマ蛙の形をした大岩。万有救済の象徴として、現在もこの岩に触れて諸病を癒やす祈願所ともなっています。

人鬼のいや蔓これる世の中は

神の御声を聞くものもなし